

令和 6 年度 第 2 回 田方農業高等学校 学校運営協議会
 令和 6 年度 第 3 回 沼津特別支援学校伊豆田方分校 学校運営協議会
 合同学校運営協議会 議事録

1 日 時 令和 6 年 9 月 13 日（金） 午後 1 時 30 分から午後 3 時 30 分まで

2 場 所 田方農業高等学校 会議室 （田方農業高等学校本館 2 階）

3 参加者 田方農業高等学校 学校運営協議会委員 6 名 職員 5 名
 沼津特別支援学校伊豆田方分校 学校運営協議会委員 6 名 職員 4 名

田方農業高等学校 学校運営協議会委員

氏 名	所 属 等
久保田 浩子（欠席）	函南町教育委員会 教育長
西村 悟	酪農王国株式会社 代表取締役社長
加藤 ひとみ	函南小学校 学校評議委員
小川原 斉	東部農林事務所 農業振興部長
近藤 優衣	ELFIE GREEN 株式会社 代表取締役
高木 基	バリュー・トーカイ株式会社 代表取締役
遠藤 芳之	保護者

沼津特別支援学校伊豆田方分校 学校運営協議会委員

氏 名	所 属 等
河野 真人	社会福祉法人 伊豆の国市社会福祉協議会 会長
鈴木 志津子	相談支援事業所 サニープレイスかなみ 相談支援専門員
岩田 聡志	就労継続支援 B 型事業所 志～cocoro～ 管理者
海野 貴	株式会社 うみのワークス 代表
鈴木 文子	沼津特別支援学校伊豆田方分校 PTA 会長
内山 智尋（欠席）	静岡大学未来社会デザイン機構 講師 社会福祉学 博士
鈴木 隆臣	株式会社 富士山ドリームビレッジ 相談役

田方農業高等学校 職員

氏 名	役 職 等	氏 名	役 職 等	氏 名	役 職 等
久保田 豊和	校長	植平 光彦	副校長	坂田 宜子	教頭
長屋 伸彦	事務長	佐藤 明彦	教務課長		

沼津特別支援学校伊豆田方分校 職員

氏 名	役 職 等	氏 名	役 職 等
青木 暁乃	校長	高木 亮	副校長
佐藤 貴志	部主事	佐藤 保寿	教務課長

- 4 内 容 (1) 開会あいさつ（沼津特別支援学校 校長）
(2) 協議「インクルーシブな学校運営モデル事業に期待すること」
ア インクルーシブな学校運営モデル事業概要説明（田方農業高等学校 校長）
イ 現在の取り組み（伊豆田方分校 部主事）
ウ 各委員から
エ 事業・現状について質疑応答
(3) 閉会あいさつ（田方農業高等学校 校長）

5 摘 要 (1) 校長挨拶（沼津特別支援学校 校長）

伊豆田方分校が田方農業高等学校内に開校して15年が経った。この間、様々な学習や行事を共に取り組んでいただき、共生・共育という中で一緒に育てていただいているということに感謝している。

田方農業高等学校と伊豆田方分校のインクルーシブ教育の研究事業が始まっているという状況の中、私たちとしても、まず、伊豆田方分校の授業、学習をより充実させていくというところから研究に協力していきたいと考えている。

(2) 協議「インクルーシブな学校運営モデル事業に期待すること」

ア インクルーシブな学校運営モデル事業概要説明（田方農業高等学校 校長）

〈事業の概要〉

専門校（農業）と特別支援学校高等部（知的）で学ぶ生徒が、両校の授業を同時に展開する「共同授業」を教育課程上に明確に位置付けて実施することで、生徒が相互理解を深め、共に地域人材として卒業後に活躍するカリキュラムマネジメントを研究し展開することにより、インクルーシブな学校運営モデルを構築する。

〈研究の目的〉

現在実施されている「共同授業」を地域（両校の学校運営協議会）や専門家の知見も含めて検証し、他教科、他校でも実施可能な汎用性のあるカリキュラムを開発し、インクルーシブな学校運営モデルを構築する。

〈研究の目標〉

【共に学ぶ】

田方農業高等学校のライフデザイン科セラピーコースで実施している「共同学習」を他の学科コースでも実施可能なものとする。

【共に働く、共に暮らす】

両校の生徒のインクルーシブ教育を「社会に開かれた教育課程」とすることで、両校の生徒のキャリア形成と地域発展につなげる。

【学校づくりの視座】

海外視察研修では、学校教育の在り方（フィンランド）、社会教育と学校の在り方（スウェーデン）、教育委員会と学校の関係性（アメリカ）の3つの視座を研究に加える。

〈研究計画〉

1 年目（令和 6 年度）

- ・「共同授業」を学習指導要領で示された、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点で整理。
- ・アンケート調査の項目検討（静岡大学小林明子教授 社会情動的スキル 相談予定）
- ・両校のカリキュラムマネジメントを学校運営協議会で熟議検討。

- ・フィンランド視察

2 年目（令和 7 年度）

- ・「共同授業」の共通指導案を作成。他教科での「共同授業」を試行。
- ・アンケート調査の実施
- ・両校の学校運営協議会においてインクルーシブ教育の位置付けを熟議検討。教育課程表、グランドデザインに明示。
- ・スウェーデン視察

3 年目（令和 8 年度）

- ・「共同授業」の実施の手引きを作成。新しい「共同授業」を実施。
- ・インクルーシブな学校運営モデルを政策提案する。
- ・アメリカ視察

〈研究の実際〉

- ・「共同授業」の実施に際しては、両校の教員のチーム・ティーチングを実施する。
- ・両校の教員による授業研究と研究授業を実施する。「共同授業」では、同じ学習活動を行いながら、個々がそれぞれの目標を達成できるための授業計画の在り方や授業場面での支援方法、効果的な学習活動などを実践によって探り、交流および共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方として提言したい。

最終的には、それぞれが、それぞれの学習目標を達成する。

個別最適な学びに向かう授業を行うことによって、学習指導要領に示された、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に努めたい。

上記 2 点の研究の充実を図る上で、以下の 4 つを行う。

- ・特別支援教育の専門家から指導助言を受け、授業のユニバーサルデザインを推進する。【共に学ぶ】
- ・卒業後に同じ地域で過ごす地域人材育成の視点から、農福連携の専門家による農作業の作業分解と運動強度（メッツ表）の作成を行う。【共に働く】
- ・高校職員による分校生を対象とした授業の実施（高校職員が分校生のみを対象に自身の専門教科を指導する機会を設け、分校生の認知的な学習スタイルを理解したり、彼らに「分かる」授業方法を身につけたりできるようにする。）
- ・事業の実施前と後の職員の意識調査を実施する。

最終的には、農業の専門科目以外での「共同学習」を実施し、普通高校にも応用できる形で提言する。また、本研究が一時例に留まらず、汎用性のある教育政策になるようにしたい。

イ 現在の取り組み（伊豆田方分校 部主事）

〈伊豆田方分校の概要〉

- ・平成21年 沼津特別支援学校伊豆田方分校が開校
- ・所在地は、田方農業高等学校北館2階
- ・主な進路は就労（企業就職、就労支援の福祉事業所利用）
- ・令和6年度の生徒数は37人（1年生13人、2年生11人、3年生13人）
- ・生徒の居住地は、3市1町（伊豆市、伊豆の国市、函南町、三島市）

〈田方農業高等学校とのつながり〉

- ・田方農業高等学校との共生・共育における伊豆田方分校のねらいと目標
行事における交流だけでなく、両校の生徒が取り組むことができる農業の専門科目の授業、作業学習において交流を行い、両校の生徒相互理解を深めつつ、相互の課題を学び合う。
- ・田方農業高等学校との共生・共育のあゆみ
平成19年度 沼津養護学校（現沼津特別支援学校）と連携授業を開始
平成20年度 田農ライフデザイン科セラピーコースが共同授業を試行
平成21年度 田農ライフデザイン科セラピーコースと分校が共同授業を実施
平成22年度 田農全コースで分校との交流活動を実施
- ・センター的機能
分校の特別支援コーディネーターが田農生に出前授業を実施
田農の支援が必要な生徒に関するケース会議に、分校の特別支援コーディネーターが参加
- ・職員研修
R5年度 田農の職員研修会に、分校職員が参加
R6年度 分校の夏季研修会に、田農校長、コーディネーターが参加

〈交流および共同学習の実施にあたっての環境整備〉

- ・共生・共育連絡協議会を実施（年3回）

	内 容	参加者
第1回 (4月)	・年間計画、時間割、交流計画、教員組織、持ち時間などを確認 ・簡単な授業計画の打ち合わせも行う	分校：副校長、部主事、教務課長、学年主任、作業班長、体育課長 田農：副校長、教頭、教務課長、ライフデザイン科、各コースなど交流授業担当者
第2回 (9月)	・前期交流反省と今後の交流予定、施設使用、防災関係などの確認	分校：副校長、部主事、教務課長 田農：副校長、教頭、教務課長
第3回 (2月)	・年間の交流反省、次年度の取組、引継ぎ事項などの確認	分校：副校長、部主事、教務課長 田農：副校長、教頭、教務課長

- ・随時、両校の教務課長が情報共有し、日程確認や施設利用調整を実施
- ・両校で可能な限り日課（授業の開始と終了）を合わせ、チャイムも共有

〈交流および共同学習の実際〉

・教育課程上の位置付け

学習内容、行事等	分校	田 農
対面式、体育祭、学校美化活動、合同防災訓練、田農祭、オープンスクール	特別活動	特別活動
分校園芸班、陶芸班、木工班、清掃班の生徒が、日ごろの作業学習で学んでいることを、田農ライフデザイン科セラピーコースの生徒にレクチャーする。ペアで活動。	作業学習 (通称「共同授業」)	教科農業・科目 「生物活用」等 (通称「交流授業」)
分校の各学年の生徒が、田農の各コース(動物活用、生産動物、食品栄養、食品加工、フード)の生徒からレクチャーを受け、コースにおける特色のある活動を共に行う。	総合的な探究の時間 (通称「交流授業」)	農業の各科目 (通称「交流活動」)
分校全校生徒と田農 3IHR 生徒とのスポーツ交流	体育	体育

- ・授業計画は両校の授業担当で連絡調整して立案している。
 - ・授業での指導体制については、活動を主導する学校の教員が進行を行い、もう一方の教員は補助的な役割を担っている。
 - ・目標は、事前に両校担当者で情報共有をしている。両校の生徒が同じ活動に取り組んでも、主活動によって役割が変わるため、目標や達成の度合いを調整するなどして工夫している。
- 評価は、各校の教員が各校の生徒を見取することを基本としている。生徒のあらわれをについて情報交換を行って評価に反映させることもある。

〈交流および共同学習の成果〉

〔伊豆田方分校〕

- ・入学選考検査の志望動機によると、同じ地域に暮らす同年代の生徒同士の関わりに魅力を感じて入学してくる生徒が多い。
- ・田農生と行う体験が日常的にあることで、校外活動や外部人材と関わる機会を苦手になっている生徒も、交流の機会を楽しめるように育っているように感じる。

〔田方農業高等学校〕

- ・日々の学習で得た知識を他者に伝える活動を、行事だけでなくそれぞれの教科・科目での中で行えるのは生徒の成長に重要だと考えられる。
- ・高度なコミュニケーションスキルを求められる職種に就いた卒業生は、職場から高い評価を受けたという話をよく聞く。
- ・特別支援コーディネーターによる出前授業や交流直後のアンケートでは、田農生から作業学習やスポーツ部についての記載が多く、肯定的なイメージをもっていることが読み取れる。

〈交流および共同学習の課題〉

- ・上記の成果は、当事者の中で、主観的にも客観的にも確かに感じられているが、エピソードや感想の域に留まっており、共同学習との因果関係は今ひとつ明確ではない。両校の生徒、保護者、教員、就労先等にアンケート調査を行うなどし、

今以上に明確にしていく。

- ・「交流および共同学習ガイド（文部科学省）」における「共同学習」の側面について、分校としてさらに明確化していく必要がある。これについては、「指導目標の立て方や学習評価」や「教員の連絡調整」を工夫することが大切だと考えられる。

ウ 各委員から

〔西村 悟 様〕

酪農王国株式会社は丹那にある。田方農業高等学校は近い関係にありとても魅力的な学校である。特別支援学校でも農業を通じて連携することがある。道の駅にも協力してもらっている。酪農王国株式会社では現在 3 人の障害者を雇用しており非常にがんばって働いている。障害者を受け入れる側としては素人なので将来的に問題が生じることも考えられる。今後、特別支援学校の生徒の雇用も増やしていきたい。また、生徒の得意なものを生かせるような作り込みもして人材を育成していきたい。丹那は交通不便な立地あるため、そのような面のフォローや問題に対する受け入れ側への指導、助言をいただけるとありがたいと思っている。

〔加藤 ひとみ 様〕

新田地区（伊豆仁田駅の近く）に在住している。退職した後、函南町の民生委員をしたりボランティアをしたりして、今は函南町の協議委員をしている。出かけると、生徒たちが来光川の土手を歩いたり桜公園で過ごしたりしている姿を見かける。しかし、田方農業高等学校内に特別支援学校ができたことを地域の人たちは知っているが、どの程度交流しているか、田農のライフデザイン科セラピーコースをはじめとする田農生と分校生がどんなことをしているのかは、地元の人にはなかなか伝わってこない。今日の説明を聞いて互いの交流がかなり進んでいることがわかってきた。それを踏まえて、さらに進んだ高いインクルーシブな環境を形にしていこうとしていることを知り、それはとても大変なことで先生方の研修も必要になってくると思った。両校が互いに知る、理解を深めるという面で、交流という活動だけでなく、本当に深く関わって進めていく苦労があると思うが、理想はインクルーシブな形になっていくのがよいのかなと思った。

〔小川原 斉 様〕

東部農林事務所は、県東部の加茂郡と富士・富士宮を除いた地区が管内となる。この地区の農業振興等に関わる業務を行っている。農業の現状においては後継者不足が深刻である。雇用したくても人がいないという状況になっている。インクルーシブな取り組みを聞いて、農林事務所で進めている農福連携の施策にも通じるものがあってありがたいと感じた。ただ、農林事務所では、人員数、人材育成、兼務制度による契約範囲の拡大等の状況から細かく対応することが難しい環境にある。そういった面でもアイデアを共有したり協力したりできたらよいと思う。

〔近藤 優衣 様〕

ELFIE GREEN 株式会社は、完全屋内型水耕栽培でレタスの栽培、予約販売を行っている。栽培したレタスは、一般向けの他に、学校給食、病院関係、福祉関係への提供を行っている。寄付という形で児童養護施設や子ども食堂への

提供も行っている。働き始めて、児童養護施設や子ども食堂にも関わっていく中で、いろいろな方々が世の中にいるということに気づいた。

インクルーシブ教育をどんどん進めていくこと意味は、新しく社会に出る人が驚かないためにも大事だと思う。大学時代、友人はインクルーシブ教育が社会にもたらす影響について研究していた。それによると、インクルーシブは一般の学生にとっても、実際に支援を受けている方々、様々な宗教や人種の方々等どんな人にとっても、違いを知った上で何ができるか考える力が身に付き、将来何かをやり抜く力「ブリット」と言われるものが付きやすくなる傾向にあるとされているそうだ。このようなこの取り組みを分校開校時から長くなされてきたということは誇るべきことだと思っている。

[高木 基 様]

函南町間宮に在住し、仕事は三島の本町で不動産賃貸業を営んでいる。最近、文科省の社会教育士の資格を取得した。それに合わせて、田方農業高等学校、函南西小学校、函南中学校の学校運営協議会委員に取り組んでいる。間宮では評議委員にも取り組んだ。この地域で何とかしたいという気持ちをもっている。その思いで、田方農業高等学校の委員にも公募で志願した。

自分の3人の子ども内、一番下の子は田方農業高等学校に御世話になった。他の子どもは普通科の高校に通った。田農を卒業した一番下の子は、今でも「学校が楽しかった」と言っている。ここに来て改めて見学させていただくと、生徒たちが楽しそうに学校生活を送っているのがわかる。農業の学校という環境で分校の生徒と一緒に学ぶということはとてもいいことだと思う。普通科の授業ではなかなか難しいと想像される。ただ、高校からだと回数が少ない。小学校や中学校の時から触れ合いがないと、本当の意味での分かち合いやインクルーシブな考え方になっていかないのではと思う。小さい頃からこのような環境に似た学校に通っていた知人がいるが、その方には多様性を受け入れる優しさをもっているように感じられる。現状、普通科での交流は難しい面があると思うが、先立って農業を介して進めていくことは素晴らしいことであると思う。

[遠藤 芳之 様]

娘が現在3年生で在学中。自分は、家では農業、外では農機具メーカーに勤務している兼業農家である。学校に関する知識は少ないが、農業と機械の面でも協力できると思い公募に応募させていただいた。

[鈴木 志津子 様]

函南町にある相談支援事業所で、主に成人の精神疾患者の相談支援を担当している。今日、インクルーシブな教育目標を聞いての感想として、高校時代の若いときから障害のある人との共同学習をとおして、お互いを知ったり理解し合ったりする経験を積んでいくことは大切だと感じた。大人になったときにもいい影響があると思われる。ただそれが学生の時でないのだめということではなく、大人になってからでも障害者のことを知ったり触れ合ったりすることも大切と思う。私の場合は精神障害者に支援しているが、障害者に対する理解はまだまだ進んでいないように感じる。自分の子どもに精神障害の診断がなされた途端、支援者とは繋がるが周りの人たちとの関係性が減っていき、気付くと家族と支援者だけになっているケースも見られる。日々、共生社会の実現とは何なのか考えさせられる。支援者だけでなく、周りの人たちが、その人なりを理解して地域や社会に溶け込んでいけるようにやっていくことが大切だと思う。

教育の分野では疎い部分があるが、このように勉強する機会を設けていただいたことにはありがたく思う。

〔岩田 聡志 様〕

函南町畑毛にある就労継続支援 B 型事業所を運営している。柏谷にはコインランドリーを新設し、利用者が経営している。コインランドリーを作った理由は、地域の人に、知的障害のある方々がいること、働いていることを知ってもらうツールとしたかったからである。元は三島に事業所を構えていたが、利用者が多くなったこともあり広い土地を求めて畑毛に移転したが、移転までには困難が伴った。困難とは何か。地域の方は障害者施設というだけで悪い先入観をもっており、移転を快く思わなかったことから地域をあげて反対しようとする動きが見られた。何度も話し合いを重ねる中で、徐々に認めてもらえるようになった。コインランドリーを作ったときには大歓迎されるようになっていた。毎日多くの人に来て声をかけてくださる。当たり前前の生活をしている中で地域に溶け込んでいくことを目指している。

農業高等学校と伊豆田方分校の取り組みはとてもよいと思う。しかし、疑問もある。この場には生徒が参加していない。生徒抜きの中で大人たちが仕組みを作っていくことについて、生徒たちはどう感じているのか。伊豆田方分校の生徒にとって田方農業高等学校の生徒と一緒にいることで経験値や将来的なプラスの面で相当なメリットがある。私の事業所に伊豆田方分校の卒業生が利用者として通所しているが、交流での経験が生かされていると感じる部分が多くある。一方で、田方農業高等学校の生徒は障害のある人と一緒に活動して「一緒にいた方がいいよね」と言葉ではわかる。しかし、例えば、生徒会があるのであれば、生徒会長や役員ではどう思っているのか。そこにどのように問いかけをしているのか知りたい。私の事業所も田方農業高等学校と交流をしているので、生徒たちがどう思っていて、本音の部分はどこに感じているのかという部分は気になる。

〔海野 貴 様〕

三島市で塗装業を営んでいる。伊豆田方分校との関係は、ある会合で伊豆田方分校の先生と知り合ったことに始まった。以降、職場実習の受け入れ、卒業生の雇用をしてきた。私は職人なので障害者と関わる経験はなかった。実際に雇用して、どのように関わったらよいかわからず悩むことがあった。

今日は、両校の取り組みを聞かせていただいて、自分の子どもも田方農業高等学校で若いときからいい活動、いい教育を受けさせてもらっていたということがわかりありがたく思った。

〔鈴木 文子 様〕

子どもが伊豆田方分校 3 年生として在学している。分校の生徒は礼儀正しく挨拶もできる。しかし、知的障害のあることで個々に違った困難があるのではないと思う。私の子どもは田農との交流がとても好きでたくさんやりたいと言っている。先ほどの岩田さんの発言を聞いて、田農生がどのように思っているのか少し気になった。小学校の時から特別支援学級に通っていたので、通常学級の子供とは挨拶くらいしかしていない。授業を進める内容について行けなかったので一緒にやることは難しかった。現状、知的障害があると特別支援学級に入る。私たちが子どもの頃と比べるとそのような子(知的障害のある子)が通常学級にいる割合は少ない。そのため、高校生になってから交流をするこ

とになっても拒否感を示す生徒もいると思う。我が子に関しては、交流の話をすると「楽しかった」「優しくしてくれた」と言っているので、今後も機会を増やしてほしいと思う。

〔鈴木 隆臣 様〕

清水町を拠点とした就労支援事業所で相談役として勤務している。今年度から田農の卒業生1名が支援員として勤務している。支援員として採用される前には見学や面接に同席する機会があった。初めから「障害者事業所に勤務したい」ということを明確に応答していた。現在の働きぶりは弊社として大変助かっている。

私は35年間の教職経験がある。久保田校長先生からモデル事業の説明があった中で、今後、学校の枠組みが国としてどうなっていくのか関心をもって見届けたいと思っている。進捗状況を知らせていただけるとありがたい。

モデル事業には2つの側面があると思う。1つ目は生徒へのアプローチ、2つ目は教職員のインクルーシブ教育に対する捉え方。多様な教職員がいる中で、授業でインクルーシブの考え方をどのように反映させていくかというのは難しい作業であると思う。愛鷹分校で勤務した4年間では、普通科の高校生との交流や共同学習を考えていくことに大変苦慮した。田農の場合は農業を核に据えることができるが、普通科ではできない。そのため、選択科目での実施を模索した。同時に、交流の目的と教科の目標を明確な取り組みを目指していた。城北高校とは、分校が交流を依頼するという関係性であった。高校と特別支援学校がメリットを感じながらWin-Winの形で実施されるようになるとよい。

エ 事業・現状について質疑応答

〔高木 基 様〕

沼津城北高等学校内にある分校での交流について知りたい。また、インクルーシブ教育に関して各委員の経験について伺いたい。

〔鈴木 隆臣 様〕

沼津城北高等学校内には沼津特別支援学校の愛鷹分校がある。現状、行事交流を主としている。田方農業高等学校は農業を核に据えた共同学習ができているが、沼津城北高等学校は普通科の高校なのでこういった枠組みで取り組んでいったらよいか模索している。

〔近藤 優衣 様〕

幼稚園時代からの友人が三島市内の中学校に勤務しているという縁で、今年、その学校の特別支援学級の中学生を工場見学に受け入れた。その時に初めて大人数で学習している様子を目の当たりにして、その子どもたちが素直で明るく、いい雰囲気の中で楽しんでいることに感激をした。いろいろな学校の生徒が見学に来るが、特別支援学級の生徒は投げかけた質問に対して答えてくれる率が高い。実物を触って見たときの反応も良く、心の底から楽しんでいるのを感じてうれしくなった。

田方農業高等学校の生徒が伊豆田方分校の生徒がと関わる時にも、多分、私と同じような感覚になっているのではないかと想像される。今行われている交流は言うまでもなく良い。さらに深く追求すると、例えば社会科でいえば世界史や日本史のように難しくなる前段階の部分で一緒に学べる機会を作るなど、攻めたアプローチも良いと思う。

〔河野 真人 様〕

伊豆田方分校の生徒が先生になって、陶芸や木工等の作業学習で田方農業高等学校の生徒に教えるという交流も良いと思う。逆に田方農業高等学校の生徒が伊豆田方分校の生徒に教えるという場合に農業はとても良い材料になっている。田方農業高等学校の生徒は、1年生の時に農業基礎でスイカを3つ作る。作ったスイカは親や恩師などに届ける。今でもよく見かける光景だが愛おしく感じる。農業をとおして伝統的に良い教育がなされていると同時に交流にも有効だと認識している。

〔田方農業高等学校 副校長〕

自分自身が農業担当の教員。以前も農業関係の高校を経験してきた。しかし、田方農業高等学校のように、校内に特別支援学校を併置している学校はなかった。農業を利用してどんな交流ができるかということで、富士特別支援学校や藤枝特別支援学校に依頼をして授業に入ってもらっていた。初めは、農業高校生徒は恐る恐る取り組んでいた。年1回では効果が現れないので回数を重ねるようにしていた。作物の植え付けから収穫までの間、徐々に接し方にも慣れて楽しめるようになっていった。最後には、収穫物にも成果が目に見えて、自己肯定感や自己有用感につながっていた。農業高校の生徒は、何事にも積極的になり、就職して地域で活躍する好循環を生むようになっていた。

田方農業高等学校と伊豆田方分校の3年間の研究では、交流をさらにブラッシュアップさせて、どこの地域でも同じように取り組めるようにしていきたい。キャリア教育という側面での可能性もあり、障害者スポーツへの興味関心が高まりボランティアに参加する、将来的に福祉大学に進学したり福祉事業所に就職したりする生徒もいる。数は多くないが、障害者と関わる中で気づきのある生徒は必ずいる。

修善寺では伊豆総合高校が中心になって清掃ボランティアが行われている。現在までに長く続いているが、初期に数回行ったところで参加者が激減した。原因は生徒が主体的に行っているのではなく、「大人が仕切っているから」と言うものだったようだ。交流の中でも、当事者の生徒たちがどう思っているか、生徒への働きかけや主体性を尊重しつつ進めることも大切だと感じている。

〔伊豆田方分校 教務課長〕

まずは、田方農業高等学校の生徒、教職員の皆様が、伊豆田方分校が同じ校舎の中で溶け込めるように親切で温かい雰囲気を作ってくださっていることに対して謝意を表したい。また、この関係を作り上げてきた先人の皆様には敬意を表したい。

伊豆田方分校の教育課程では「共生・共育」として交流および共同学習を位置付け、計画や目的を学校経営書に記載している。交流は、基本的にこれまで作り上げられてきたものを踏襲してきている。私自身、これまでの交流が好きで、その流れで取り組んできているという安易さがあった。交流が伊豆田方分校の教育課程に明記されていることを再認識し、生徒にとってどのような目的で行われ、どのような成果を求めていくのかなど、伊豆田方分校の「共生・共育」について整理していこうと考えている。

〔伊豆田方分校 副校長〕

私も、田方農業高等学校の方々に御協力いただきながら、気持ちよく仕事をさせていただいていると感じている。

伊豆田方分校では、この夏に「共に育てる自立と輝き～伊豆田方分校地域応援団合同研修会～」を開催した。地域とつながること、地域に生きる生徒の応援者を増やそうという意図で計画した。委員の皆様の意見にもあったように、現状を「知ってもらう」ことがとても大事だと考える。この研修会には在校生や卒業生がパネルディスカッションのパネラーとして参加し、現状や本音を話す場面があった。当事者の生の声を聞く機会をとおして、生徒たちから聞くことの大切さも感じた。2学期にはオープンスクールもあり、田方農業高等学校と伊豆田方分校が同日開催なので、地域の方々に伊豆田方分校の生徒も見ただけたらありがたい。

伊豆田方分校は田方農業高等学校との共生・共育に力を入れているが、地域に出ることも大切にしており、伊豆ゲートウェイ函南にも御協力いただいている。先日は、木工班が魚売り場に吊り下げるモビールの製作依頼を受け納品した。陶芸班は年間として小皿を納品し販売を委託している。清掃班は窓清掃を請け負っている。園芸班は新入社員と合同で花壇作りにも取り組んでいる。学校で作業するだけでなく、実際に使われている場面を見たり校外に出て作業したりすることで学習効果が高まっている。地域でも貴重な学習の場を与えていただいている。田方農業高等学校との共生・共育を足がかりにしながら地域とつながっていくことも大切にしていきたい。

〔沼津特別支援学校 校長〕

今、文部科学省の研究指定にあたって、両校の学校運営協議会の委員にお集まりいただいたことに意義があり、非常に有益であったと、御意見を聞かせていただきながら、本当にありがたいと思った。

先程、伊豆田方分校の教務課長が触れたことだが、昨年から教育課程上の押さえをしっかりとしようということを共有してきた。自然になってしまうと活動ありきになってしまう。学指導要領上において本校の学習がどうか、教育課程でしっかりと押さえしていく必要がある。この取り組みの非常に貴重なところは、互いに同じ教育活動をしているということだ。非常食を作ったりアロマワックスサシェを作ったり、やっていることは同じである。しかし、田方農業高等学校の生徒は、田方農業高等学校の先生が制度の中でしっかりと単位を取れる教育課程を組んでいる。伊豆田方分校は個別の指導計画にある目標をしっかりと達成できるかということを求めている。同じ活動に取り組んでいるのだが、それぞれの枠組みでそれぞれの目的を達成できることが非常に大切だと思っている。これまでも自分たちの教育を理解するということはしてきていると思うが、より良くするという意味で、伊豆田方分校としては、特別支援学校の学習指導要領をもう一度復習うことで、田方農業高等学校との共生・共育の中で育てられる部分を考えていきたい。田方農業高等学校の先生方も高等学校の学習指導要領を改めて読み返していただいて、伊豆田方分校の生徒と学ぶことで達成できる目標や評価などにどんなものがあるか考えただけるとありがたい。

(3) 閉会あいさつ（田方農業高等学校 校長）

私は田方農業高等学校の園芸科を卒業した。農業教員となり採用2校目で田方農業高等学校に赴任した。平成6年にはボランティアサークルの顧問、平成12年にはライフデザイン科セラピーコース設立の担当者をしていた。当時から交流活動をしていたが、静岡県がユニバーサル園芸という言葉に注目するよ

うになったタイミングと重なった。ライフデザイン科セラピーコースの交流は教育課程の位置づけで生物活用という科目になっている。生物活用という科目は、動物や植物を介して様々な人と触れ合うという農業高校の科目として作られた。現在、この科目や交流活動を実施している農業高校の割合は全国で95%を超えている。つまり、どこの農業高校でも授業の中で交流が行われている。対象は特別支援学校、保育園、高齢者施設など様々である。田方農業高等学校副校長が言っていた交流経験も、実は教育課程上に科目として位置付けることができていたから可能であったのである。このようにシステムができると広がっていくということがわかる。インクルーシブな学校運営モデル事業の研究も時間はかかると思うが、システムができ明文化されると、学習指導要領に反映されて広がっていくことも考えられる。

今回の学校運営協議会は田方農業高等学校と伊豆田方分校の共同開催となった。これもシステムである。これまで、同じ敷地内で一緒に教育活動をしているが別々に学校運営協議会を開催していた。今年年に1回は共同開催し、同じ敷地内でどんなインクルーシブな教育が行われていて、今どうなっているのかということを知っていただきたい。学校運営協議会の動きの中に、地域の複数の高校での共同開催、小中学校での共同開催という考えも出てきている。つながりを意識した共同開催の有用性が注目されている。田方農業高等学校と伊豆田方分校でも共同開催を継続して、事業の進捗状況を共有したり共同授業の様子を見学したりしていきたい。

来年の見学は、田方農業高等学校3年生と伊豆田方分校の共同授業がよいと思っている。2年生になって交流を始めた段階では、生徒たちが交流の意味や方法を理解できていない。伊豆田方分校の先生のガイダンスを聞いて、「何でこの授業を受けなければならないのか」と疑問をもつ生徒もいる。しかし、回数を重ねて3年生になると適切な距離感や接し方を理解して共同授業に取り組めるようになるからである。今の高校生は私たちより柔軟である。多様性、みんなで学ぶといったことに対してハードルが低い。数回の交流で楽しめるようになる。私たちは小学校の頃から環境教育の影響を受け、それが学校教育の中でDNAに結びついていく。今の大学生は省エネやボランティアに熱心であり、コンビニで小遣いから募金する多くは中高生である言われている。そういった部分でも、若い世代が社会変革をしている。共同授業を見学していただき、私たちより環境、人権、SDGsなどに柔軟に対応している高校生に、どのようなシステムでどのような体験を与えると社会に出たときにインクルーシブな意識をもって地域で活躍できるか考えていけたらと思う。

沼津特別支援学校の校長からは卒業生にアンケートを実施するアイデアをいただいた。15年の歴史があって当時高校生だった人たちが親になっている。確実に変化はあると思っている。先日の「共に育てる自立と輝き～伊豆田方分校地域応援団合同研修会～」に出席した際には、自分の教え子が親となり子どもが伊豆田方分校に通っているということもあると知った。過去の保護者から2人の子どもの内、1人が田方農業高等学校、もう一人が伊豆田方分校に通っていると聞いたこともあった。親子、兄弟といったつながりの中で共生・共育を捉えている人が地域で増えてきたのを実感している。

今年、来年、再来年と少しずつ研究を重ね、汎用性のあるプログラムに迫っていくが、本当にできるか、静岡県に採用されるか、農業高校でないと難しい

と評価されてしまうのかなどの不安もある。インクルーシブの動きは変わりつつある。今後、高等学校の生徒が行う交流のエッセンスが小中学校にも降りていくことも考えられる。

研究指定を受けた10校で、例えば北海道では、教育委員会をあげた3年間の教育計画の中の1項目となっている。静岡県は、田方農業高等学校と伊豆田方分校の取り組みを押し出している。文部科学省の期待も大きい。どれだけ応えられるか未知数である。学校体制やシステムを作っていく際には地域の理解も必要だ。共生・共育も同じである。学校の先生が学校の中だけで作っていくのではなく、学校運営協議会でも意見をいただきながら地域の賛同を得て正当性をもっていきたい。今日は辛口な意見もいただいた。肯定的な意見ばかりだと脆弱なシステムになってしまう。周りからの要望に応えられるシステムを作っていきたい。

今日、このように田方農業高等学校と伊豆田方分校の学校運営協議会を共同開催できたようにシステムを作っていくと、そのシステムを使って、他校もやってみようという動きが出てくると思う。来年度も共同開催するので、引き続き御協力願いたい。